# 我が街の記念碑 モニュメント 3

## むいから民家園

狛江市

# 市民運動により保存

## 皆が利用できる活用型施設

文化財としては珍しく年間2万人超もの来場者がある

【狛江・設計・知見孝一通信員】小田急線連続立体交差・複々線化工事で取り壊される予定の荒井家主屋でしたが、市内に在住する建築関係者が中心となり市民運動を立ち上げ募金・調査・解体・記録・保存・復元工事を進めてまいりました。調査により建物は18世紀中ごろに建てられたことが判明、市の文化財に指定され保存が決まりました。

平成4年3月解体から平成12年の復元工事着工までの期間、部材は収蔵庫を建て市民の手で大切に保管されてきました。

市民と行政の協働により平成12年秋復元工事に着手、小学生を始め多くの市民が荒壁土作り・塗り・三和土・茅葺などの作業に参加しました。建物は平成14年春に完成、狛江市立古民家園（愛称むいから民家園）が開園しました。

また、運動を進めてきた会を中心に「運営市民協議会」が設立され、管理運営を市より委託され、年中行事・教室・こども事業・イベント・維持活動など年間100日を超えるさまざまな催事を進めてきました。

平成27年には、市内の名主「高木家の長屋門」の移築も実施することが出来ました。

「むいから民家園」は文化財としては珍しく、誰でもが自由に利用できる活用型施設として開放しており、年間2万人を超える来場者があります。

## さくらさま

### 写真

朱川湊人は1浪して志望大学に合格した。高校の担任に絶対無理といわれた大学であったので、朱川の父親も合格を非常に喜び、入学式に一緒に行って、朱川の写真を撮りまくった。

あげくに誰でもいいからと、知らない新入生を捕まえ、朱川と並ばせて写真を撮った。父親が舞い上がって撮った写真だったが、朱川は写ってくれた新入生が嬉しそうな顔をしてくれていて、ちょっといいと思ったという。

## 忘れえぬこと

### 視界から消えた新人

#### 今さらだけど「スマン」

造園工　新井靖雄

もう20年近く前のこと。独立して多少仕事も増えてきたので、手元にと若い衆を1人入れた頃の話です。

新人を連れて仲間の剪定作業に入った時のこと。まだ新米の彼（匿名）には、もっぱら片づけなどを中心に刈込の真似ごとをさせていた程度でしたが、先さんの気遣いもあり「新人君も剪定したら」と声を掛けていただきました。でも、さすがに心配だったので、同じ木に2人で乗り込み、教えつつ枝をパチパチやっていました。木はクスやシイなどのよくある、さほどデカい木ではありませんでした。

新人は一生懸命やっておりました。枝を戻すので、鋸で切りもしていたのですが「問題」が起こります。植木屋ならわかるのですが、剪定していると、木の中は切った枝や葉っぱで一杯になります。足で蹴ったり、払ってゴミを落としながら仕事をするんですが、彼の周りは葉っぱだらけ。まさか？それはないだろ？とは思って注意するのを忘れていましたが、こともあろうに彼は自分の乗っている枝を鋸で「切っちゃった」。

鈍いメリメリと言う音とともに視界から消えていく新人君。しまったと思った時には時すでに遅し。幸い下の枝で、2・5m程の高さ。ゆっくりと折れたのでケガはありませんでした。

「ケガと弁当はテメエ持ち」の時代の昔話。この話は今では通用しませんね。「やっちゃった」のは、注意しなかった私の責任でしょう。なぜなら、その時一番驚いたのは、何を隠そう"私"でしたから。○○君スマン！　（調布）

## 詰将棋

持駒 金

| 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 一 |
| | 金 | | 王 | 歩 | | 二 |
| | 銀 | | | | 歩 | 三 |
| | 歩 | 歩 | 歩 | | | 四 |
| | | | | 馬 | | 五 |
| | | | | | | 六 |

## チョット一服（963）

俳人の金子兜太さんが亡くなった。自らの戦争体験から2度と戦争をしてはいけないと発言を続け、澤地久枝さんに頼まれて、「アベ政治を許さない」と揮毫（きごう）した。「安倍」としなかったのは安心・安寧が倍になるからイヤなのでということだった。

1944年に金子さんが赴任したトラック諸島では、多くの餓死者が続出した。悲惨な戦争を許してはいけないとの思いが深かったのだろう、晩年に書かれた「あの夏、兵士だった私」に綴られている。これからも戦争体験者がさらに減って行く。記憶をどのように伝えるのか。私たちは重い責任を負っている。

## 本ほん

# 子どもはみんな問題児。　中川 李枝子

## 『ぐりとぐら』の作者が語る子育て論

【本部・書記・末浪明子記】表紙の子ども達の姿に「懐かしい」と思う方も多いのではないでしょうか。

本書は「ぐりとぐら」、「いやいやえん」の著者・中川李枝子さんが絵本作家になる前、保育士として働いてきた経験を通して、子ども達から教わったことや大人としての在り方などを寛容な眼差しと優しい言葉で記した子育て論です。

子どもは汚くて自分中心、でも「子どもらしいのが一番」、常に全力投球で「大人が学ぶべき存在」というのが李枝子先生の意見。子どもはこうであってほしいという大人の概念は勝手な思い込みだと教えてくれます。

また、世の中のすべてのことは子どもの将来にかかってくる、母親こそ世の中の先端に立っているという自覚を持ち、社会に関心を持つべきだとも提唱します。私にも子どもがおり、子育てに追われて、いつも自分は社会から取り残されていると感じていたので、この言葉には心が救われ、視界が開けるような気持ちになりました。

これらの考えは、子ども達にかかわる現在の社会制度や保育のあり方へも警鐘を鳴らしているようにも感じます。女性の活躍や子育て政策など単に型を作ることだけでなく、本来、人が育つということ自体が尊く、素晴らしいこととして捉える視点が大切だと考えさせられます。

全体として母親へ宛てていますが、男性や孫育て中、そして、かつては子どもだったすべての大人の方へお薦めの一冊です。李枝子先生の妹、山脇由利子さんが描く、逞しくもいじらしい子ども達の挿絵も必見です。（新潮社・1080円税込）